【研究ノート】

イタリア語における再帰動詞について

青　木　洋一郎

1. はじめに

1.1　本稿の目的

イタリア語において，そしてまたロマンス諸語全体において，再帰動詞の用法は理論的にも実践的にも大きな比重を占めている。再帰動詞は，これまでの膨大な議論の蓄積にも拘わらず，学習上も研究上も細かいところを見るとまだまだ議論すべき点が多い興味深い統語的実体である。こうしたイタリア語における再帰動詞について，ここ数年で筆者なりに考え方の糸口をつかめたように思えたので，紙幅の許す限り問題点を整理して議論に一石を投じたいというのが，本稿執筆の動機である。

1.2　本稿の構成

以下では，先ず第 2 章においてイタリア語の再帰動詞の特質を概観し，第 3 章では，比較対照のためにラテン語における再帰と中・受動態を説明する。その後，第 4 章では主に Kemmer の理論を参考にしながら再帰と中動の類似点と相違点を指摘し，第 5 章で再帰動詞における源動詞 Source Verb の他動性の影響について考察する。

1.3　先行研究

再帰動詞を巡る議論には，少なくとも 3 種類ある。通時的にせよ共時的にせよ再帰動詞の形態論と用法の分類に徹したもの，中動態に結びつけたものと，再帰代名詞の特性に重きを置いたものである。これらの中で，本研究が必要とする議論は，中動態関係の研究に含まれていることが多かった。中動態に結びつけたものの中では，Kemmer 1993 が再帰との関りを比較的重視しており参考になった。また，生成文法とその周辺においては，筆者の関心のある議論が非対格性を巡る領域に移し変えられていることが多かったように思われた。そこで，今回のところ，こちらについては再帰的指示との関りを注視しつつ，今後もその発展を興味深く見守るに留めることにした。

2. イタリア語の再帰動詞

2.1　再帰動詞とは

再帰動詞は，再帰的形態素と動詞が共に用いられた動詞の用法を指す。「自分自身を」「自分の身体を」という意味の要素が付け加わるタイプの動詞である。ただ，イタリア語では，英語のように独立性の高い代名詞を用いるのではなく接語代名詞を用いるため，それ自体でひとつの活用形のようになっている。その種の用法の中には，既に語彙化されているものも有るし，そうでないものも有る。英語の再帰代名詞を用いた動詞でも，その意味を熟語として覚えなくてはいけないものが有るが，イタリア語ではその傾向が更に強まり，動

詞を生産する有力な手段の一つとなっている。その意味変化は，もっぱら，脱他動詞化（自動詞化）あるいは反使役化として説明されるが，能動態と受動態の中間である中動態として説明されることも多い。中動態については，良く知られた言語の中では古典ギリシア語の例が分かりやすいだろう。

2.2　伝統文法と記述文法における再帰動詞

イタリア語の伝統文法において，再帰動詞はどのように考えられていただろうか。Battaglia & Pernicone 1978 においては，「再帰形」という用語を用い，主語によって完遂される動作が直接目的語に移る代わりに同じ主語に帰る・反射する時に，他動詞は再帰形を持ち得ると説明している。それに先立つ Trabalza & Allodoli 1934 は，やはり「再帰形」という用語を用い，本来的な再帰動詞は，動作が代名小辞によって表現された同じ主語に反射する能動態の他動詞であると説明している。Regula & Jernej 1975 は，「再帰動詞」という用語を用い，その最も基本的な用法は，自分で動作を遂行しながら，主語が目的語と一致するものであるとしている[(1)]。

2.3　態としての再帰動詞

Serianni はその『イタリア語文法』*Grammatica italiana*[(2)] の中で，能動態，受動態と並べ，再帰動詞を態 diatesi の一種として説明している。態には 3 種類有り，能動態は「動作主と主語が一致している時」，受動態は「動作主が主語では無い時」，“再帰的態” diatesi riflessiva は「主語と目的語が一致している時」のものである。受動態と“再帰的態”は，ただ他動詞とのみ持たれ得る。自動詞に対して助動詞 essere を用いると，それは過去の表現になってしまうし，非強勢形の代名詞を付加すると，代名自動詞になるのでないなら，正しくない形になってしまう[(3)]。なお Serianni にとって，ここで述べた再帰動詞は，代名動詞 verbi pronominali の一種であり，その最も根源的な型である。Serianni は，これに riflessivo diretto の名を与えている[(4)]。

2.4　再帰代名詞からの説明

一方，Renzi 他編の『イタリア語大リファレンスグラマー』*Grande grammatica italiana di consultazione*[(5)] においては，再帰代名詞という単位で記述が進められている。

例えば，Salvi 2001 によると，本来的な用法において，再帰代名詞は動詞の項をその本来の役割と共に表し，再帰的あるいは相互的な解釈を示す。その際には，接語形・自立形，どちらとして出現しても良い。また，派生的な用法において，再帰代名詞は動詞の項を表さず，接語形としてのみしか出現しない。派生的な用法の一部は語彙化されており，いわゆる代名自動詞となる[(6)]。

また Cordin 2001 は，Salvi の説明を引き継ぎ，再帰代名詞接語形は直接目的語あるいは間接目的語を表現するために用いられることや，再帰代名詞自立形の分布について述べた後，stesso や medesimo 等の再帰を強調する形容詞についても言及する。更に，非再帰代名詞が再帰的指示をする場合等についても述べ，込み入った文において再帰代名詞が複数の一致の可能性を示すこと等を論ずる。そして，名詞句内部の再帰的指示の問題，再帰代名詞の語彙化や相互的解釈の問題について触れている[(6a)]。

2.5　再帰動詞の形態

前述の通り，イタリア語の再帰動詞は，動詞と再帰代名詞を共に用いたものである。イタリア語の再帰代名詞には，強勢形（自立形）me, te, noi,

voi, sé と非強勢形（接語形）mi, ti, ci, vi, si が有る。3 人称の si（sé）は再帰専用で，単数・複数兼用である。逆に言えば，1・2 人称単数・複数においては，再帰専用の形態が無い。これらの再帰要素は対格と与格を外見上区別しない[7]。

これらの代名詞の内，非強勢形はそれ自体のアクセントを持たず動詞の前後にくっつく。その位置は，イタリア語における通常の非強勢形の位置に従う。従って，現代イタリア語においては，不定法と命令法の一部に対して後ろから，その他の全ての定形動詞に対して前から接着するのが基本である。

2.6　再帰動詞の分類

再帰動詞には，その構造や用法に従って，いくつかの分類がある。例えば Serianni は先程の riflessivi diretti に加えて，riflessivi reciproci や riflessivi indiretti，そして intransitivi pronominali を挙げている[8]。以下，少し順番を変えながら，この Serianni の 4 分類に沿って説明してみたい。

2.6.1　本質的再帰動詞

再帰動詞の最も根源的用法は再帰代名詞が直接目的語になっているものである。「（身体を）洗う」「服を着る」等の動詞が，それに相当する。これを本質的再帰動詞 “verbo riflessivo proprio” と呼ぶ[9]。

(1)　Vesto mio figlio di una camicia rossa.
「私は自分の息子に赤いシャツを着せる。」

(2)　Mi vesto di una maglietta bianca.
「私は白い T シャツを着る。」

2.6.2　形式的再帰動詞

次に，再帰代名詞が間接目的語になっている用法が有る。こちらの方を，形式的再帰動詞 “verbo riflessivo apparente” と呼ぶ[10]。

(3)　Mi metto la cravatta.
「私はネクタイを身に付ける。」

この用法は，身体の部分を目的語とする動詞に多く，身体の所属は所有形容詞ではなく間接目的語で表すという用法と重なっている。切り離せないものの所有を間接目的語で表していると言って良いだろう。

(4)　Mi lavo i denti.
「私は歯を磨く。」

2.6.3　相互的再帰動詞

再帰代名詞には，複数で用いた時に相互的解釈の余地が生ずるというひとつの問題がある。例えば次の例文においては，「彼ら（彼女ら）はそれぞれ鏡を覗き込む。」と「彼ら（彼女ら）は鏡の中にお互いの姿を見る。」との 2 つの解釈が可能だと言えないことは無いようである。

(5)　Si guardano nello specchio.

もっぱら上記のような相互的解釈においてのみ用いる再帰動詞を相互的再帰動詞と呼ぶことが多いと思われる[11]。

(6)　Si salutano davanti alla scuola.
「彼ら（彼女ら）は学校の前で挨拶をし合う。」

2.6.4　代名自動詞

最後に，再帰要素が形骸化してしまった用法が有る。

(7)　Non mi accorgevo di te.
「私は君の事に気付いていなかった。」

上記の例文においては，　再帰代名詞 mi を省略することはできず，また Non *ti accorgevo … とも Non accorgevo *me … とも言うわけにはいかない。動詞の補語は前置詞 di の後に表現さ

れるし，再帰代名詞は強勢形にすることができない。この種の用法を代名自動詞“verbo intransitivo pronominale”と呼ぶ[12]。

上記のものは代名自動詞の特性が典型的に現れたものであるが，代名自動詞に関しては本当に様々な考え方が有り，また個々の動詞が代名自動詞か否かということに関しても判断が分かれる。Serianni によると，代名自動詞には，⑴非再帰形が存在せず必ず再帰代名詞を伴わなくてはいけないもの，⑵再帰形と非再帰形のどちらを用いても良いもの，そして⑶再帰形と非再帰形の間で語義の違いが生ずるもの，の 3 種類が有ると考えるべきであるということになる。

なお，代名自動詞には，状態の自動詞から由来した動作を表す動詞が含まれている。

⑻ Sono seduto sulla sedia.
「私は椅子に座っている。」

⑼ Mi sono seduto.
「私は座った。」

これは，Kemmer にならって言うと状態の変化の動詞ということになろう[13]。

2.7 まとめ

まだまだ議論の余地は有るものの，現代イタリア語における再帰動詞の基本的な分類は，以上に示した「本質的再帰動詞」「形式的再帰動詞」「相互的再帰動詞」「代名自動詞」の 4 種類である。なおこれ以外にも，si という代名詞は，他動詞の 3 人称単数・複数形と共に受身の動詞を，また自動詞の 3 人称単数と共に非人称の動詞を形成する，ということを忘れるわけにはいかない。

3. ラテン語との比較

ラテン語においては，再帰代名詞に加えて，受動態が中動態に当たる役割を果たしたので，状況がもう少し複雑になると言って良い。そのために，先ずは古典ラテン語における再帰と受動態の形態論をおさらいしておこう。

3.1 ラテン語の再帰と中・受動

ラテン語の再帰的形態素としては，再帰代名詞 se や再帰的指示の所有形容詞 suus，それから強調の形容詞 ipse が挙げられるだろう。ラテン語の再帰代名詞については，従属節において，直接支配している動詞の主語にではなく主動詞の主語に一致するという，いわゆる間接再帰がしばしば問題となる。なお，相互的表現には inter se（nos, vos）を用いる。

一方，ラテン語の受動態は，現代のロマンス諸語とは違って総合的な形態論を示した。但し，単独の変化形でまかなえたのは，直説法で言うと現在・未完了過去・未来のいわゆる本時称においてのみであり，同じく完了・過去完了・未来完了の副時称においては sum（esse）の活用形（本時称）＋過去分詞という現代語に近い分析的な形態論を示した。

また，受動態の活用形を示しても意味的には能動である deponentia 異態動詞と，これと似ているが副時称においてのみ受動態的な分析的語形変化を示す semi-deponentia 半異態動詞の存在を忘れてはならない。ラテン語の deponentia を現代語における代名動詞に相当するものと考えるのはごく自然なことである。

そして，意味的に考えると印欧語的な中動態とみなせる受動態の用法もあった。例えば，Baldi[14]は直接中動，間接中動，相互中動の例を示している。だが，確かに彼の言うとおり，ラテン語における中動態とは deponentia の説明のために用いられる概念にしか過ぎないという見方もできるか

も知れない。いずれにせよ，その意味上の類似性から，再帰的表現が中動態の肩代わりをすることは十分可能であった。ラテン語において，中動態は受動態と再帰的構成の両方で代用できたということになる。

3.2　通時変化の中の再帰と中・受動

ラテン語からロマンス諸語への通時変化の過程において，上で述べたような総合的な受動態は廃れ，時の助動詞と過去分詞を用いる分析的な受動態が主流になった。先ずは，語末子音の消失という音声変化によって，一部の人称において能動と受動の区別がつかなくなったことが，その原因のひとつに挙げられる。結果として，ラテン語受動態の副時称に相当する形が，ロマンス諸語における現在系統の時制を表すようになっている。

ラテン語からロマンス諸語へと変化する際には，再帰的語法の体系も変化を被っていた。中世ラテン語において，再帰代名詞自身は，3 人称の非再帰代名詞と混同されるようになった。それは，再帰的指示の所有形容詞においても同じであり，こちらは現代語において主に非再帰の意味になってしまっている[15]。また，受動の意味で再帰的語法を用いるようになる過程が進展しているということもしばしば指摘されるところである[16]。更に，イタリア語においては再帰代名詞の接語化という現象も起っているが，それは本稿の範囲を超える。

4. 再帰と中動

4.1　再帰から中動へ

Faltz はその『再帰化』*Reflexivization*[17] において，再帰の本質が coreference に有る事を確認した上で，再帰の形態論を名詞再帰と動詞再帰に分け，更に前者を主要部再帰，付加部再帰，代名詞再帰に分類している[18]。そして，世界中の言語の用例を統語的に分析した上で分類し，最終的に再帰の類型を複合再帰，代名詞再帰，動詞再帰の 3 種類に分け，最後のものは前 2 者のどちらからも由来し得るという遷移過程を考えている。この動詞再帰は中動へ遷移し，更に語彙化していくと考えられる[19]。

4.2　中動の中の再帰

Kemmer は，その『中動態』*The Middle Voice*[20] において各種の中動態を論じているが，その大部分は再帰的構成に充てられている。中動態は，通言語的であるが，その実現形態は多様である。その中で，ロマンス諸語は再帰という手段を中動態の実現のために用いる言語の代表格である。イタリア語はその種の言語の典型例とみなすことができる。

Kemmer は，先ず中動態で現れやすい動詞の存在を指摘する[21]。例えば，身体の世話，非位置変化動作，姿勢の変化，間接中動 indirect middle, 本質的に相互的な事態，位置変化動作，感情の中動，感情的発話活動，感情的な含みを伴った発話活動，認識の中動，自発的事態，発話者参照の中動 logophoric middle, 受動・非人称・容易の中動である。もちろんこれは飽くまでも全体的な傾向であって，言語間でも言語内でもきれいに分かれるわけではない。また，中動形は有ってもそれに対応する無標の形が無い例も通言語的に見られ，ラテン語の deponentia もこれに当たるとしている。また，多くの言語で再帰形態素が中動の役割を担っており，それまで含めると「重い形」と「軽い形」と呼べる 2 種類の中動態の表現が存在している言語も多い。時には「軽い形」も再帰要素由来である。

次に，Kemmer は，再帰を「直接的再帰」，

「間接的再帰」と「発話者参照再帰」logophoric reflexive に区分する[22]。類型論的に考えると，再帰は中動にとって重要な統語的手段ということになるが，その原型をなすのは，動作主・経験者が被動者と同一でどれも人間である「直接的再帰」である。この再帰的構成においても，先程の中動態特有の動詞と重なるものが多数見受けられる。そして，再帰要素は本質的に表現上の要請，つまり強調に基づいており，再帰的戦略の本質としてはこちらも軽視できない。また，「間接的再帰」は古典ギリシア語に見られるような本来の中動態に近いものである。ここで再帰と中動の相違が確認できる。だが，再帰的構成全般においては「間接的再帰」の方が有標であることもまた確かである。なお「発話者参照再帰」は本稿において取り扱わない。

さて，‘middle’ という記号は単に「中間の」という意味であり，例えばある言語の動詞の態に関して述べているという環境が有って，ようやく中動態を十全に指示するようになる。つまり能動態と受動態の「中間」であるということになるわけである。Kemmer は，‘middle’ を 1 項動詞と 2 項動詞の中間に位置付けられるものとする[23]。そして，本質再帰は受動・相互と 1 項・2 項の中間に位置付けられる[24]。すると，個別言語の再帰形態素の統語的役割は，この 2 軸からなる平面の上のひとつの領域として示すことができる[25]。

4.3　再帰化と強勢

Faltz にならって言うと，再帰の機能的な根拠は名詞要素における同一指標付与と強調に有る[26]。強調と再帰代名詞の関りは，通言語的なものである。例えば，“I went to Rome myself.” 等といった英語の発話を考えてみるだけでも良いだろう。これは，Kemmer も歴史的な経緯として確認していることであり[27]，再帰は非再帰に対して有標であるという感覚に更なる根拠を与えることになる。無論，イタリア語の再帰代名詞もその例外ではないだろう。イタリア語においても，直接目的語を持たない動詞に対して，間接目的語として再帰代名詞を付与することが可能であるし，そもそも，目的語と主語が同一のものであるから，一方を強めればもう片方も強まるというのは構造的に当然のことである。

4.4　再帰の形態論

再帰的形態素は，他の要素が普通は持っている一致に必要な屈折要素を持ち合わせていない場合が有る。つまり，再帰代名詞の類型論においては，重い形と軽い形の区別だけでは無くて，より豊かな再帰とより貧しい再帰の違いが有ると言える。例えばドイツ語の再帰代名詞においては人称のみならず一部に格も現れ，また英語の再帰代名詞においては性・数が現れるが，イタリア語の再帰代名詞においては，それらのどれも省略されてしまう。だが，逆にそのおかげで，イタリア語の再帰動詞においては，対格・与格の区別が表面上吸収されてしまうとも言える（但し，イタリア語でも強勢形を用いたり強調の形容詞を用いたりすると，性数・格はある程度顕在化する）。また，再帰的構成は中動態の表現できない情報を提示し得るが，本来の中動態にも直接・間接の区別が無いというわけではない。

再帰の指示が必ずしも安定しないのは，言語によっては，上で述べた形態論上の貧しさという特性が影響しているのかも知れない。それに加え，ひとつの文に 2 つ以上の動詞が有る場合，再帰代名詞は，普通の代名詞よりは一致上の選択肢が狭まるものの，同一指標を付与する可能性が，必ずしも一意的に定まるわけではないということも有

る。それらを決定するのは，もっぱらスコープであるということになるが，その範囲も，とりわけ強調要因が関ってきた時にいくらかの自由度を持つことになる。

4.5 「隠れ受身」

ここで再帰という構造についてもう一度考えてみたい。主語と目的語が同一指示であるということは，ある同一の実体が何かをすると同時に何かをされているということを意味する。つまり，能動であると同時に受動でもあるということを意味している。ここからひとつ言えるのは，再帰の述語には受身が含まれている可能性が有り，そのような解釈の余地が生ずるということである。言うなれば，再帰動詞は「隠れ受身」でもある。これは，本質的再帰動詞だけではなく，形式的再帰動詞にも当てはまる。類型的に言うと，受身には直接受動と間接受動が有る[28]が，本質再帰と形式再帰の違いは，これとパラレルであると考えることもできよう。

また，再帰の述語においては，単に同一実体が主格でもあり，対格・与格でもあるというだけではなく，「スル」事態と「サレル」事態とが同時に起きていると考える余地も有るということには注意しておこう。つまり，ここで問題にしているのは “L’assassino si ammazza.”「暗殺者は自殺する」が再帰であり，“Si ammazza l’assassino.”「暗殺者が殺される」が受身である[29]というような問題ではなく，動詞の意味の内部構造の問題である。

4.6 受動と能動の間で

再帰動詞が中動態であるということは，隠れ受身としての特性を考えると，能動でもあり受動でもあるということを意味している。つまり，日本語で再帰的構造を再帰的表現を用いて訳すことを選ばないとしたら，能動あるいは受動の表現を用いて訳すことが可能だということになる。従って私たちが，再帰動詞を「訳す」ということは，再帰動詞を日本語ないしは他の言語という別の表示で解釈しなおすということであるわけだが，その際に，条件さえ許せば複数の解釈の可能性が生ずるということになる。

主語が動作主で有る場合は，事態の中に能動の要因を含み得るが，そうでない場合は，受動の要因の方が際立つと考えることができる。逆に，能動要因が重要な場合は，受動の訳は不適切である。また，自発としての解釈を表す訳し方も必要となるだろう。最終的には統語的要因や更には語用論的要因も加味して判断する必要も有る。

別の言い方をすると，再帰動詞の解釈としては能動優勢と受動優勢の 2 種類が有り得るという考え方ができることになる。組み合わせとしては，どちらも優勢あるいは劣勢となる分布も考えられる。イタリア語の si が再帰・受動・非人称にまたがって使用され得る事実は，こうした構造によっても裏付けを得ることになろう。また，相互的用法は，どちらも優勢な場合のひとつであると考えられる。

4.7 2 つの事態

さて，再帰において重なっているのは，動詞の項だけではない。考え方によっては，2 つの事態が重なっているということにもなる。つまり，‘x＝y’ というだけではなく，「x が y を a する」という事態と，「y が x に a される」という事態を同時に認識できるということになるわけである。これは，広義の事象構造的な観点からも言えることだが，Kemmer は事態の相対弁別度（精錬度）relative distinguishability（elaboration）of

events, あるいは認知科学的な granularity 粒度，つまりは事態の解像度という観点から論じた[30]。再帰・中動の相互的用法は，正に動作の複数性の認識から生じていると考えられるということである。この認識は，再帰動詞における態に関わる諸特性ではなく，むしろその「動作性」の理解に寄与するものであると思われる。動作は不加算でも加算でもあることは，イタリア語を知っているものなら，遠過去における動作の１回性と，半過去におけるその反復性の対比等から，親しんでいることである。また，事態の重層性は，再帰代名詞がもともと持つ強調的性格に加えて，いわゆる代名自動詞において動作の強調が起ることとも調和的である。

5. 再帰と選択制限

5.1 再帰と有生性

再帰が成り立つ際には，指標以外の素性も一致している。従って，先立って指標以外の属性が一致し得ない環境では，本来ならば再帰が成り立たないはずである。それが分かりやすい事例のひとつは，有生性に着目した場合である。動詞には選択制限が有る。直接目的語に主語のそれとは異なる有生性を要求し得る動詞は，少なくとも条件付で再帰化の要件を満たさないことになる。

再帰動詞を有生性の観点から分類しようとすると，主語の有生性によって分類するということになりかねない。しかし，再帰動詞の内的性質を調べるためには，非再帰形，または Source Form である他動詞，つまり再帰動詞の源動詞の性質を調べなくてはいけないのである。そして，それが再帰動詞のフォーマットに合っている場合とそうでない場合とで，再帰化操作が動詞句の意味論に与える総合的な影響を場合分けして検討することができるということになるはずである。

5.2 ヒト・コト・モノ

とりあえず，有生性を中心として名詞句の性質を整理してみたい。先ず，名詞句は有生と無生に分かれる。更に無生名詞句の方は，実体と事態に分かれる。だが，無生実体は有生実体と再グループ化することもできよう。結果として，名詞句全体を実体性名詞句と事態性名詞句の２つに分けることも可能である。つまり，名詞句の分類に際しては，有生性と事態性の２つの基準が並存しているということである。また，事態性名詞句の意味構造には参与者が内包されていることになる。国文法でヒト・モノ・コトという分類はこの構造に対応していると考えることができる。

5.3 有生性とその分布

その一方で単純に考えると，他動詞の項を巡る有生性の分布は，主語と目的語の有生性に応じて以下の４種類のパターンが考えられることになる。

Ⅰ．主語が有生で目的語が無生であるもの
Ⅱ．主語が無生で目的語が有生であるもの
Ⅲ．主語も目的語も両方とも有生であるもの
Ⅳ．主語も目的語も両方とも無生であるもの

Ⅰ.やⅢ.の類型はありふれたものであるが，Ⅱ.やⅣ.の類型はそうではない。Ⅱ.の類型においては，有生目的語が間接目的語で現れることが多いと思われるが，直接目的語で現れる例が無いわけでもない。Ⅳ.の類型は更に想起しがたいが有り得ないものではなく，どちらも事態を表す要素であった場合等がそれに当たると言えるだろう。

いずれにせよ再帰化が行われた時には，有生あるいは無生の要素を持つ単項の動詞として機能す

る。その場合は，両者がもともと同素性の場合は問題無いが，異なっている場合に説明が必要となる。元の主語と目的語の間に素性上のずれが有る場合は，強制的な意味構造（特質構造）の変更が行われると考えることもできる。また，有生・無生のどちらでも良いという場合を想定して場合分けすることもできるだろう。だが，ここでは敢えて分布の対称性に着目してみたい。

5.4　使役と有生性

他動詞の一部には使役の特性を持つものが有る。その種の他動詞の直接目的語は使役の動作主（被使役者）となるため，有生要素を選択することが期待される。その一方，使役的でない他動詞においては，意味的に考えてその直接目的語が有生・無生のどちらを選択することも有り得る。従って，使役的意味を持つ2項の他動詞においては，主語と直接目的語が対称的な関係になりやすくなるということができよう。つまり，スル型よりもサセル型の動詞の方がより高い再帰親和性を持つということになる。

スル型の動詞においては再帰化に際して特別な選好傾向が見られなかったにしても，サセル型とスル型の総和においては，サセル型の傾向が顕在化するということは言うまでも無い。従って，再帰動詞の源動詞においては，総じて目的語が有生要素である傾向が見られると感じるのは自然なことであると言えるだろう。

5.5　対称性

これを言い換えると再帰動詞をとりまく名詞句における有生性の分布においては，対称的な素性の配置が重要であるということになると思われる。再帰動詞になるためには，何らかの形で主語と目的語の対称性が必要だということである。その際，2種類の場合が考えられる。ひとつは，元の他動詞がその条件に適っているという場合である。もうひとつは，再帰化を経ることによって，そのような条件がそろう場合である。これらのような2種類の動詞が有った場合，前者の方がより再帰親和度が高いと言っても差し支えないだろう。

対称性とは何か，どういう次元のどのような対応関係を意味するのかという議論はともかく，そもそも言語には対称性とは反する性質が含まれているものだが，それゆえに，対称性が確認できるケースは興味深い[31]。これもまたそのひとつであろう。

従って，再帰動詞には2つの類型が有る。ひとつはもともと主語と目的語の意味素性が一致しているもの。もうひとつは，再帰化の結果，その一致が起こるものである。無論，前者の方がより再帰親和性が高いというのは自明なことである。

再帰動詞は単項の動詞であり，その唯一の項が有生ないしは無生の特性を持つことになるが，その特性の由来は単一ではない。これ以上は，再帰代名詞というよりも動詞本体の問題なので，他動性や非対格性等に基づいた議論が必要になるが，それはまた別稿に譲ろう。動詞の項構造が選択制限も含めてどのような分布になっているか，それに再帰的指示が絡むと理論的にどのような組み合わせが生じ得るか，そして，現実の用例においてそれらがどう現れているか，特に意味論的類型との関わりはどうか，こういったことを今後検証していく必要が有る。

6. 結　び

6.1　再帰動詞の形成経路と語義

最後になるが，今後注意していきたいのは，再帰動詞の場合も形成経路を考えなくてはいけない

が，その際には，ある動詞の用例全体が再帰的語法に推移するというよりも，複数の語義が有る中で選択的にある特定の語義から再帰動詞が形成されると考えるべきだということである。その場合，ひとつの源動詞から複数の再帰動詞が生じたり，結果として生じた再帰動詞の意味が源動詞の主要な意味からは遠ざかってしまうということも有り得るだろう。そして，本稿を通じて述べたことは，個々の語義やそれに伴う形成経路に当てはめていくべきことである。

6.2　ラテン語の体系とイタリア語の体系

能動と受動の間の広がりに，ラテン語では再帰・中動と deponentia が，イタリア語では再帰動詞・代名動詞が入っている。構造が変質してしまったようにも思えるが，能動・中動・受動をひとつの軸とすると隠れ受動は deponentia の鏡像である。こう考えてみると，ラテン語とロマンス諸語は基本的に態を巡る構造を変えていないのかも知れない。この構造保持に貢献しているのは再帰動詞であり，接語としての再帰代名詞であるように思われる。

他の言語では不透明な形で現れているものが，イタリア語，またはその他のロマンス諸語において再帰要素として現れている。そして，この通り，再帰は様々な文法理論の試金石となっている。

本研究はイタリア学会第 57 回大会（2009 年 10 月）における筆者の口頭発表を加筆修正の上でまとめたものである。

注

（1） Battaglia & Pernicone 1978, pp. 178–179; Trabalza & Allodoli 1934, pp. 182–185; Regula & Jernej 1975, pp. 208–210. なお，言語学者ではないが，作家 Alfredo Panzini（1863–1939）は次のような表現を残している。“Verbi *riflessivi*: sono i verbi in cui l’azione ha passàggio, o tràn sito, dal soggetto all’oggetto; se non che soggetto ed oggetto non sono due persone o cose differenti; sono la stessa persona o cosa. Perciò l’azione si piega o riflette sopra lo stesso soggetto: *io mi pento,* cioè il sentimento doloroso del peccato ricade sul peccatore.”（「再帰動詞は，その中で動作が主語から目的語に渡る，あるいは移る動詞である。けれども主語と目的語が異なる 2 名の人や 2 つの事物ではない。それらは同一の人や事物である。従って，動作は同じ主語の上に屈曲，あるいは反射する。『私は後悔しています』すなわち罪の苦しい感情が罪人の上にのしかかっている。」）Panzini 1982, p. 66.

（2） Serianni 1998.

（3） 同書，p. 385.

（4） 同書，p. 387.

（5） Renzi, Salvi & Cardinaletti 2001.

（6） Salvi 2001, p. 101.

（6a） Cordin 2001, pp. 593–603.

（7） 同書，p. 593; 等。

（8） Serianni 上掲書，pp. 387–390. また，Battaglia & Pernicone（上掲箇所）と Trabalza & Allodoli（上掲箇所）も，これと同質の 4 種類に分類している。Regula & Jernej（上掲箇所）は 5 種類に分類しているが，代名自動詞が 2 種類に分かれているだけで，基本的な分類の枠組みは変わらない。

（9） Battaglia & Pernicone（上掲箇所）は la forma riflessiva propriamente detta と表現し，Trabalza & Allodoli（上掲箇所）は riflessivo proprio, Regula & Jernej（上掲箇所）は riflessivo transitivo（diretto）と呼んでいる。

（10） Serianni（上掲箇所）の用語で riflessivi indiretti と呼んだものである。Serianni は，また apparenti とか transitivi pronominali とも呼ばれると指摘している。Battaglia & Pernicone（上掲箇所）は la forma che si dice comunemente riflessiva apparente と表現し，Trabalza & Allodoli（上掲箇所）は riflessivo improprio, Regula & Jernej（上掲箇所）は riflessivo indiretto（apparente）と呼んでいる。

（11） Serianni（上掲箇所）の用語で riflessivi reciproci と呼んだものである。Battaglia & Pernicone（上掲箇所）は la forma che si dice reciproca と表現し Trabalza & Allodoli（上掲箇所）も Regula & Jernej（上掲箇所）も riflessivo reciproco と呼んでいる。

（12） Serianni（上掲箇所）の用語で intransitivi

pronominali（riflessivi intransitivi）と呼んだものである。Battaglia & Pernicone（上掲箇所）は la forma pronominale と表現し，Trabalza & Allodoli（上掲箇所）は riflessivo intransitivo と呼び，Regula & Jernej（上掲箇所）は更に 2 つに分けた上で riflessivo «intransitivo» と riflessivo assoluto（verbo pronominale）と呼んでいる。

（13） 自動詞から由来した代名自動詞としては移動の動詞に再帰代名詞と分離を表す代名小辞 ne を付けたタイプが良く知られている。

（例）andarsene「去る」（←andare「行く」）

（14） Baldi 1999, pp. 392–396.

（15） Harrington 1997, pp. 34–35; Sidwell 1995, pp. 365–366; Beeson 1953, pp. 18–19.

（16） Weiss 2009, p. 524; Harrington 1997, p. 45, p. 50; Väänänen 1967, pp. 135–136.

（17） Faltz 1985.

（18） 同書，第 2 章。

（19） 同書，第 4 章。

（20） Kemmer 1993.

（21） 同書，pp. 16–28.

（22） 同書，p. 42.

（23） 同書，p. 73.

（24） 同書，p. 202.

（25） 同書，p. 206, p. 211, p. 226.

（26） Faltz 上掲書，第 1 章。

（27） Kemmer 上掲書，p. 47.

（28） Citko 2011, pp. 110–115; 等。

（29） Rohlfs 1968, p. 187.

（30） Kemmer 上掲書，pp. 109–119, pp. 209–210.

（31） Citko 上掲書。

主要参考文献

※必要な場合はブラケット内（[ ]）に初版年を記した。

欧文

Ackema P. & Schoorlemmer M., “Middles” in Everaert M. & Riemsdijk H. van (eds.), *The Blackwell Companion to Syntax vol. III,* Malden (MA): Blackwell, 2006, pp. 131–203.

Baldi P., *The Foundations of Latin,* Berlin: de Gruyter, 1999.

Battaglia G., *Grammatica italiana per stranieri,* Roma: Bonacci, 2004.

Battaglia S. & Pernicone V., *Grammatica italiana: Nuova edizione,* Torino: Loescher, 1978.

Beeson C. H., *A Primer of Medieval Latin,* Washington, D. C.: Catholic University of America Press, 1953.

Bizos M., *Syntaxe latine,* Paris: Vuibert, 1997.

Cantrall W. R., *Viewpoint, Reflexives and the Nature of Noun Phrases,* The Hague: Mouton, 1974.

Cennamo M., “Classi verbali e cambiamento sintattico: la reinterpretazione passiva del costrutto riflessivo” in *Atti del XXXII Congresso Internazionale di studi [della Società di Linguistica Italiana], Budapest, 29–31 ottobre 1998,* Roma: Bulzoni, 2001, pp. 225–242.

Citko B., *Symmetry in Syntax,* Cambridge: Cambridge University Press, 2011.

Cole P., Hermon G. & Huang C.-T. J. (eds.), *Long-Distance Reflexives,* San Diego & Tokyo: Academic Press, 2001.

Cordin P., “I pronomi riflessivi”, in Renzi, Salvi & Cardinaletti 2001, pp. 593–603.

Croft W., *Typology and Universals, Second Edition,* Cambridge: Cambridge University Press, 2003.

Dixon R. M. W., *Basic Linguistic Theory 2, Grammatical Topics,* Oxford: Oxford University Press, 2010.

Elcock W. D., *The Romance Languages,* London: Faber & Faber, 1975.

Ernout A. & Thomas F., *Syntaxe latine,* Paris: Klincksieck, 1951.

Fagan S. M. B., *The Syntax and Semantics of Middle Constructions,* Cambridge & New York: Cambridge University Press, 1992.

Faltz L. M., *Reflexivization,* New York: Garland, 1985.

Flobert P., *Les verbes déponents latins des origines à Charlemagne,* Paris: Les Belles Lettres, 1975.

Fox B. & Hopper P. (eds.), *Voice: Form and Function,* Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 1994.

Frajzyngier Z. & Curl T. S. (eds), *Reflexives,* Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 2000.

Geniušienė E., *The Typology of Reflexives,* Berlin & New York: Mouton, 1987.

Givón T., *Syntax: An Introduction,* 2 vols., Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 2001.

Harrington K. P. (ed.), *Medieval Latin,* revised by Pucci J. with a grammatical introduction by Goddard Elliott A., Chicago: University of Chicago Press, 1997 (2).

Harris M. & Vincent N. (eds.), *The Romance Lan-*

guages, London: Routledge, 1990 [1988].

Hatcher A. G., *Reflexive Verbs: Latin, Old French, Modern French,* New York: Johnson Reprint, 1973 [1942].

Hofmann J. B., *Lateinische Syntax und Stilistik,* neubearbeitet von Szantyr A., München: Beck, 1997.

Hopper P. J. & Thompson S. A., "Transitivity in Grammar and Discourse", in *Language* 56, 1980, pp. 251–299.

Kemmer S., *The Middle Voice,* Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 1993.

Klaiman M. H., *Grammatical Voice,* Cambridge & New York: Cambridge University Press, 1991.

Koster J. & Reuland E. (eds.), *Long-Distance Anaphora,* Cambridge & New York: Cambridge University Press, 1991.

Mantello F. A. C. & Rigg A. G. (eds.), *Medieval Latin,* Washington, D. C.: Catholic University of America Press, 1996.

Moro A., *Dynamic Antisymmetry,* Cambridge (MA): MIT Press, 2000.

Næss Å., *Prototypical Transitivity,* Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 2007.

Panzini A., *Grammatica italiana,* Palermo: Sellerio, 1982 [1941].

Regula M. & Jernej J., *Grammatica italiana descrittiva,* Bern & München: Francke, 1975 (2).

Reichenkron G., *Passivum, Medium und Reflexivum in den romanischen Sprachen,* Weimar: G. Uschmann, 1932.

Reinhart T. & Reuland E., "Reflexivity", in *Linguistic Inquiry* 24, 1993, pp. 652–750.

Renzi L., Salvi G. & Cardinaletti A., *Grande grammatica italiana di consultazione Vol. I,* Bologna: Il Mulino, 2001.

Rohlfs G., *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti: morfologia,* Torino: Einaudi, 1968.

Salvi G., "I pronomi riflessivi e il «si» impersonale e passivo", in Renzi, Salvi & Cardinaletti 2001, pp. 101–113.

Serianni L., *Grammatica italiana,* Torino: UTET, 1998.

Sidwell K., *Reading Medieval Latin,* Cambridge & New York: Cambridge University Press, 1995.

Smyth H. W., *Greek Grammar,* Cambridge: Harvard University Press, 1984.

Steinbach M., *Middle Voice,* Amsterdam: Benjamins, 2002.

Trabalza C. & Allodoli E., *La grammatica degl'italiani,* Firenze: Le Monnier, 1934.

Trifone P. & Palermo M., *Grammatica italiana di base,* Bologna: Zanichelli, 2000.

Väänänen V., *Introduction au latin vulgaire,* Paris: Klincksieck, 1967.

Weiss M., *Outline of the Historical and Comparative Grammar of Latin,* Ann Arbor: Beech Stave Press, 2009.

和文

影山太郎,『動詞意味論』, 東京：くろしお出版, 1996.

同,『形態論と意味』, 東京：くろしお出版, 1999.

高津春繁,『ギリシア語文法』, 東京：岩波書店, 1960.

藤田健,『ロマンス語再帰代名詞の研究』札幌：北海道大学出版会, 2010.